

短期大学入学以前の保育体験が学生に与える影響

佐野 友恵*

The Effect of Experience in Early Childhood Education and Care before Entering Junior College

Tomoe Sano*

Abstract

The aim of this research was to clarify the effect and significance of student experience in early childhood education and care before entering junior college.

The investigation was conducted using 265 students from the Department of Childhood Education and Welfare in the college. It was found that the 179 students who had previous experience in the field held more positive views of both children and kindergarten teachers, felt the significance of early childhood education and cared more, and had a greater tendency to want to become nursery teachers.

キーワード

experience in early childhood education and care, training for nursery teachers

はじめに

研究目的および研究方法

平成16年6月に閣議決定された「少子化社会対策大綱」には重点課題として「若者の自立とたくましい子どもの育ち」「仕事と家庭の両立支援と働き方の見直し」「生命の大切さ、家庭の役割等についての理解」「子育ての新たな支え合いと連帯」の4点が掲げられた。これらの重点課題は、「子どもが健康に育つ社会」「子どもを生み、育てることに喜びを感じることのできる社会」への転換を目指すものであり、平成21年度までに講ずる対策と目標の例の一つとして、保育所、児童館、保健センター等において中・高校生が乳幼児とふれあう機会を提供することがあげられている。これは幼稚園教諭や保育士といった幼児教育・保育の専門職の養成を目的とするものではなく、あくまでも多くの若者に子どもと触れ合う機会を提供し子育てに肯定的なイメージを持たせるための方策として挙げられた例である。このような形で保育所や幼稚園における職業体験が多くの小・中・高等学校のカリキュラムに組み込まれたことにより¹⁾、保育者養成校には、入学前に既に保育体験を有

*さの ともえ：大阪国際大学短期大学部講師〈2006.6.26受理〉

する学生が入学してくるようになった。

保育体験に関する研究は、主に中学・高等学校の生徒を中心とした研究²が進められてきたが、近年では、保育者養成校側からの視点による研究も見られる³。小学生、中学生、高校生を対象とした保育体験の広がりや踏まえ、養成校入学前の保育体験の内容や保育体験が学生の保育者としての成長にどのような影響を与えているのかを明らかにすることは養成校の教育内容の検討に際して必要なことだと考えられる。

そこで、本研究では保育体験を有する学生とそうではない学生の両者に質問紙調査を実施した。主な質問項目は、保育体験の有無、本学入学前に有していた保育・幼児教育に関する知識やイメージ、入学前と現在の進路希望等についてである。より具体的な保育体験の影響を明らかにするために、一部の分析において主成分分析を用い、養成校入学前の保育体験が学生の保育観や進路希望にどのような影響を与えているのかを検討する。

なお、調査概要は次の通りである。

調査概要「養成校入学前の保育体験に関する調査」(有効回答数265)

調査対象 本学幼児保育学科学生 (女性のみ)

学 年	1 年次生	180名
	2 年次生	85名
コース内訳	保育コース	207名
	音楽コース	26名
	体育コース	32名

実施時期 2006年5月中 授業中に配布回収をおこなった

1. 保育体験の有無による学生の保育関連事項に対する意識差

保育体験の学生への影響を検討する前段階として、まず保育体験の有無について確認しておく。今回の調査に回答した幼児保育学科の学生265人のうち、保育体験を有する者は179名(67.5%)であり、学生の凡そ7割が本学入学前に幼稚園や保育所等における保育体験を有している。学年別でみると、本学入学前に保育体験を有する学生は1年次生の69%、2年次生の65%である。

養成校入学前の保育体験は、あくまでも職業体験・子どもと触れ合う機会を提供するという目的で行われているものであり、幼稚園教諭や保育士といった保育・幼児教育の専門職の養成を目的としたものではない。とはいえ、保育体験を経て本学幼児保育学科に入学した学生にとっては、本学入学前の保育体験も保育者への成長の一過程として捉えることができる。保育体験を機に幼児保育系の進路を志した者にとっては保育体験が保育者を目指すスタートラインとなり、保育体験以前から希望していた学生にとってはより具体的に職業としての保育者像を確立する契機となる。そこで保育体験を有する学生とそうでない学生の保育に関連する事項に対する知識や意識の違いを明らかにすることで、保育体験が持つ影響を明らかにする。

短期大学入学以前の保育体験が学生に与える影響

(1) 保育体験が保育者観に与える影響

保育体験をして幼児保育の現場に対して否定的な意識を持つ場合、進路選択の際に幼児保育系学科へ進学しないことが予想される。そのため、保育体験を有した上で、本学幼児保育学科に入学してきた学生は、入学前の保育体験により「保育」に関して肯定的な意識を持っていると考えられる。

そこでまず、職業人としてのモデルとなる保育者⁴についてのイメージを尋ねた。保育者のイメージについては「保育者の人柄」と「保育者に必要とされる技術」に関する質問をした⁵。(表1)

表1. 保育体験の有無と保育者観

項目	保育体験の有無	非常に強く思う	強く思う	そう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	ほとんどそう思わない	全然そう思わない	合計
保育者は明るいイメージだ	有	46.4%	30.7%	20.1%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	38.4%	29.1%	26.7%	4.7%	1.2%	0.0%	0.0%	100.0%
保育者は親切的なイメージだ	有	41.9%	23.4%	27.5%	9.4%	1.1%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	31.4%	22.1%	32.6%	12.8%	1.2%	0.0%	0.0%	100.0%
保育者は優しいイメージだ	有	45.8%	23.5%	22.9%	6.1%	1.7%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	32.6%	24.4%	25.6%	17.4%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
保育者は活発なイメージだ	有	43.3%	32.6%	19.1%	5.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	36.0%	30.2%	26.7%	5.8%	1.2%	0.0%	0.0%	100.0%
保育者は運動神経が良いイメージだ	有	12.8%	18.4%	31.3%	29.6%	7.8%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	12.8%	15.1%	29.1%	34.9%	7.0%	1.2%	0.0%	100.0%
保育者は歌が上手なイメージだ	有	20.7%	23.5%	35.8%	16.2%	3.4%	0.6%	0.0%	100.0%
	無	18.6%	23.3%	32.6%	19.8%	4.7%	1.2%	0.0%	100.0%
保育者は美術が上手なイメージだ	有	33.5%	30.2%	23.5%	11.2%	1.7%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	25.6%	39.5%	25.6%	9.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
保育者には専門知識が必要だ	有	43.3%	20.2%	28.1%	5.6%	2.8%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	31.4%	29.1%	26.7%	12.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

クラスカル・ウォリス検定 +p<.10* p<.05** p<.01

表1から明らかな通り、保育者の人柄に関する「保育者は明るいイメージだ」「保育者は親切的なイメージだ」「保育者は優しいイメージだ」「保育者は活発なイメージだ」の項目に関しては、保育体験の有無にかかわらず学生の大部分が非常に肯定的なイメージで保育者を捉えている。同時に、保育体験を有する学生の方がより強く肯定的なイメージを有していることもこの結果から言えるであろう。

一方で保育者に必要とされる技術面から、学生の保育者イメージをみると、「保育者は運動神経が良いイメージだ」「保育者は歌が上手なイメージだ」「保育者は美術が上手なイメージだ」「保育者には専門知識が必要だ」という項目については保育体験の有無による差はみられない。

(2) 保育体験が子ども観に与える影響

次に、保育対象となる「子ども」に対する意識について調査した。調査項目は学生の子どもに対する肯定感の強弱を検討するため7件法を用いた。保育体験の有無による子ども観の差は次の通りである。(表2)

表2. 保育体験の有無と子ども観

項目	保育体験の有無	非常に強く そう思う	強くそ う思う	そう思う	どちらとも 言えない	あまりそ う思わない	ほとんどそ う思わない	全然そ う思わない	合計
子どもは可愛い	有	79.3%	15.1%	4.5%	0.0%	0.6%	0.6%	0.0%	100.0%
	無	65.1%	23.3%	9.3%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%	100.0%
子どもが好き	有	78.2%	13.4%	6.7%	0.6%	0.6%	0.6%	0.0%	100.0%
	無	61.6%	18.6%	17.4%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%	100.0%
子どもは興味深い存在だ	有	56.4%	26.8%	11.2%	4.5%	0.6%	0.6%	0.0%	100.0%
	無	37.2%	32.6%	23.3%	7.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
子どもから学ぶことは多い	有	57.5%	24.0%	15.1%	2.8%	0.6%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	45.3%	24.4%	23.3%	7.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
子どもは賢い	有	21.5%	20.3%	36.2%	18.1%	4.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	無	10.6%	20.0%	36.5%	29.4%	2.4%	1.2%	0.0%	100.0%

クラスカル・ウォリス検定* p<.05** p<.01

このように、子どもについての意識は保育体験の有無にかかわらず概ね肯定的である。しかしながら、「非常に強くそう思う」と答える割合に注目するならば、各項目に共通して保育体験を有する学生の方が高い割合にあるのが分かる。自由記述においても、保育体験の中で印象に残っている事項として「子どもが可愛かった」という回答は非常に多く、子どもに対するプラスの印象が保育者志望につながっていることが推測される。

(3) 保育体験が学生の保育者適性意識に与える影響

次に、学生が自らの保育者適性についてどのように考えているのかについて検討する。保育者適性については「自分は子どもの役に立てる存在だ」「自分は子どもの保護者の役に立てる存在だ」「自分は子どもに人気がある」「自分は子どもと仲良くなれる」「自分は子どもと遊ぶのが上手だ」「保育の仕事に就くことで社会に貢献できる」「自分は保育者に向いていると思う」「保育の仕事は自分にできそうだと思う」の8項目について学生の意識を調査した⁶。(表3)

中学・高校生を対象とした保育体験に関する先行研究の中でも、保育体験を通して、対子どもの自己効力感が上がることは既に指摘されているところである⁷。そこで、本調査では保育体験を有する学生とそうでない学生の保育者としての適性意識の差に着目した。

全ての質問項目に共通して、保育体験を有する学生は、保育体験を有さない学生に比べて自らに保育者としての適性があると感じていることが指摘できる。特に「自分は保育者に向いていると思う」「保育の仕事は自分にできそうだと思う」という保育者としての職業適性に関する設問については保育体験の有無により回答傾向に大きな差が見られる。

短期大学入学以前の保育体験が学生に与える影響

表3. 保育体験の有無と保育者適性

項目	保育体験の有無	思う	どちらとも言えない	思わない	合計
自分は子どもの役に立てる存在だ	有	46.3%	46.9%	6.7%	100.0%
	無	36.1%	52.3%	11.6%	100.0%
自分は子どもの保護者の役に立てる存在だ	有	39.7%	49.2%	11.2%	100.0%
	無	25.6%	54.7%	19.8%	100.0%
自分は子どもに人気がある	有	41.9%	49.2%	8.9%	100.0%
	無	31.4%	55.8%	12.8%	100.0%
自分は子どもと仲良くなれる	有	79.3%	17.3%	3.4%	100.0%
	無	69.8%	24.4%	5.8%	100.0%
自分は子どもと遊ぶのが上手だ	有	58.1%	39.1%	2.8%	100.0%
	無	48.9%	39.5%	11.6%	100.0%
保育の仕事に就くことで社会に貢献できる	有	59.8%	35.2%	5.1%	100.0%
	無	43.5%	47.1%	9.4%	100.0%
自分は保育者に向いていると思う	有	49.7%	40.8%	9.5%	100.0%
	無	29.1%	52.3%	18.7%	100.0%
保育の仕事は自分にできそうだと思う	有	54.2%	38.0%	7.8%	100.0%
	無	32.6%	45.3%	22.1%	100.0%

クラスカル・ウォリス検定 * p<.05 ** p<.01

2. 保育体験が学生の進路希望に与える影響

(1) 本学入学前の学生の進路希望

調査対象学生の入学前の進路希望は表4の通りである。幼稚園教諭や保育士といった幼児保育の専門職を目指して本学に入学している学生は、本学入学前に保育体験有する学生の82.1%、保育体験のない学生の67.4%であり、14.7%の開きがみられる。

幼児保育学科で学んだ専門知識をいかせる一般就職の希望者は大半が音楽コースと体育コースの学生であり、それぞれ音楽教室の講師やスポーツインストラクター等の志望である。

表4. 本学入学前の進路希望

保育体験の有無	幼児保育職(幼稚園教諭or保育士)	幼児保育学科で学んだ専門知識をいかせる一般就職	一般就職	進学	何も考えていなかった	わからない	合計
有	82.1%	6.7%	0.6%	2.2%	0.6%	7.8%	100.0%
無	67.4%	15.1%	2.3%	2.3%	2.3%	10.5%	100.0%

カイ自乗検定 p<.05

(2) 現在の保育者志向

入学前の進路希望とあわせて、「現在、幼稚園教諭もしくは保育士になりたいと思っていますか」という保育者志向を問う質問をおこなった。その結果、現在、幼稚園教諭もしくは保育士になりたいと回答したのは、入学前に保育体験を有していた学生の86.5%、保育体験を有さない学生の76.5%であった。

保育者志向を有する学生に対して、更に「はじめて幼稚園教諭もしくは保育士になりたいと思った時期」(表5) および「あなたはどの程度、幼稚園教諭もしくは保育士になりたいと思っていますか」(表6) という質問をおこなった。

表5. 保育者になりたいと初めて思った時期

保育体験の有無	小学校就学以前	小学校時代	中学校時代	高校時代	本学入学後	わからない	合計
有	16.7%	27.3%	36.7%	16.0%	2.0%	1.3%	100.0%
無	4.6%	26.2%	15.4%	38.5%	6.2%	9.2%	100.0%

カイ自乗検定 $p < .05$

表6. どの程度、幼稚園教諭もしくは保育士になりたいと思っていますか

保育体験の有無	絶対になりたい	なりたい	なってもよい	合計
有	53.9%	39.5%	6.6%	100.0%
無	26.2%	55.4%	18.5%	100.0%

カイ自乗検定 $p < .05$

保育者を志した時期については保育体験を有する群では中学校時代までに8割が保育者を志している。それに対して、保育体験を有さない群で中学校時代までに保育者を志したのは5割に満たず、4割近くが高校時代に保育者を志し本学に入学している。

また、「どの程度、幼稚園教諭もしくは保育士になりたいと思っていますか」という設問が保育者志向のある学生にのみ向けられた設問であるにもかかわらず、その回答傾向をみる限り、保育体験を有する学生の方が強く保育者を目指していることがわかる。

小学校・中学・高校時代に保育体験ができるかどうかは、本人の意向だけでなく、学生の卒業した学校の方針(希望する職場体験が可能な学校もあれば、機械的に職場体験の場所を割り振られる学校もある。保育体験を必修としている学校もあれば、そうではない学校もある)に左右される場合もあるが、小さい頃から保育者を希望しているからこそ、学校で職場体験の機会があった場合に幼児保育関連施設を希望することが多くなるであろうし、保育体験をすることによって保育者志望が強化されていることが予想される。実際、

表7. 入学前の保育体験の有無と入学後の就職志望の変化

保育体験の有無	志望継続	志望	非志望継続	志望しなくなる	合計
有	78.1%	8.4%	9.0%	4.5%	100.0%
無	61.2%	15.3%	16.5%	7.1%	100.0%

カイ自乗検定 $p < .05$

本学入学前の保育体験の有無によって、入学前の進路希望と現在の進路希望との進路希望の関係进行分析したところ、保育体験を有する学生の方がそうでない学生に比べて進路希望が継続していることが明らかとなった。(表7)

3. 主成分分析による保育体験の具体的効果

保育体験が保育者志望の学生に与える影響が大きいことは既にもてきた通りであるが、保育体験で具体的に何を感じ、学んだことが、幼児保育の専門職を目指し本学幼児保育学科への入学につながったのかという点を明らかにするために、「保育者は体力的に楽な仕事だと思う」「保育者は精神的に楽な仕事だと思う」「保育は暇な仕事だと思う」「保育の仕事は給料が高い」「保育の仕事は休日が多い」「保育の仕事は早出や残業がないと思う」「保育の仕事は責任が重くないと思う」「保育者は明るいイメージがある」「保育者は親切的なイメージがある」「保育者は優しいイメージがある」「保育者は活発なイメージがある」「保育者は頭が良いイメージがある」「保育者は母性的なイメージがある」「保育者には専門知識と技術が必要だと思う」「幼稚園や保育所は楽しい場所だと思う」「幼稚園や保育所は社会に貢献していると思う」「幼稚園や保育所は働きやすい場所だと思う」「幼稚園や保育所は子どもが遊ぶ場所だと思う」「幼稚園や保育所は子どもが勉強する場所だと思う」「幼稚園や保育所は地域に貢献していると思う」という質問項目を抽出し、これらの質問について因子分析をおこなった。

その結果、3つの因子が抽出された。なお、因子抽出には最尤法を用い、適合度の検定をおこなったところ、有意であった。表8は、プロマックス斜行回転後の結果である。

第一因子は「保育職の肯定感」と命名した。第二因子は「職業についての知識」と命名した。第三因子は「幼稚園・保育所の意義」と、それぞれ命名した。

その上で、本学入学以前に保育体験を有する学生、保育体験をしていない学生とを2群にわけて因子得点の比較をおこなったところ、第一因子「保育職への肯定感」と第三因子「幼稚園・保育所の意義」については有為な差がみられた。それに対して、第二因子「職業についての知識」については有為な差は見られなかった。(表9)

つまり、「職業に関する知識」については、保育体験の有無による差は認められず、「保育職の肯定感」や「幼稚園・保育所の意義」には有為な差がみられたため、保育体験の具体的な影響としては第一因子「保育職への肯定感」および第三因子「幼稚園・保育所の意義」であることが指摘できる。

4. 記述にみる保育体験の意義

質問紙の最後に記述式による設問を設けた⁸。保育体験の有る学生に対する設問は「保育体験の中で印象に残っていること」「保育体験をしたことで幼児保育学科での勉強にプラスになっていると思うこと」「保育体験をしたことで幼児保育学科での勉強にマイナスになっていると思うこと」の3項目である。

入学前に保育体験を有する学生の「保育体験の中で印象に残っていること」として出てきた記述は、「保育体験での楽しかった・嬉しかった思い出」(73件)、「保育体験での辛か

表8. 保育観に関する因子分析

	第一因子	第二因子	第三因子
保育者は体力的に楽な仕事だと思う		0.78	
保育者は精神的に楽な仕事だと思う		0.82	
保育は暇な仕事だと思う		0.75	
保育の仕事は給料が高いと思う		0.55	
保育の仕事は休日が多いと思う		0.66	
保育の仕事は早出や残業がないと思う		0.60	
保育の仕事は責任が重くないと思う		0.52	
保育者は明るいイメージがある	0.77		
保育者は親切なイメージがある	0.93		
保育者は優しいイメージがある	0.88		
保育者は活発なイメージがある	0.78		
保育者は頭が良いイメージがある	0.50		
保育者は母性的なイメージがある	0.62		
保育者には専門知識と技術が必要だと思う	0.43		
幼稚園や保育所は楽しい場所だと思う	0.57		
幼稚園や保育所は社会に貢献していると思う	0.53		0.56
幼稚園や保育所は働きやすい場所だと思う	0.48		0.42
幼稚園や保育所は子どもが遊ぶ場所だと思う	0.40		0.45
幼稚園や保育所は勉強をする場所だと思う	0.40		0.48
幼稚園や保育所は地域に貢献していると思う	0.43		0.49
因子間相関		-0.14	0.65
			-0.01

因子抽出法：最尤法

表9. 保育体験の有無による因子得点の比較

	平均値の差	t 値	p
第一因子	0.32	2.51	0.01
第二因子	-0.09	-0.71	0.48
第三因子	0.26	2.10	0.04

n=176

った・悲しかった思い出」(34件)、「子ども理解に関すること」(19件)、「保育者に関すること」(11件)、「自分の行動」(9件)、「保育体験を通して理解したこと」(7件)、「保育者としての適性に関すること」(7件)である。学生にとって保育体験の中で印象に残っていることは、圧倒的に楽しかった・嬉しかった思い出に関する記述が多い。その中でも、「子どもが先生と呼んでくれた」「自分が作ったもの(玩具や紙芝居等)を子どもが喜んでくれた」といった回答が目立っている。保育体験での辛かった・悲しかった思い出としては、「子どもとの接し方が分からなかった」「子どもが何を言っているのか理解できなかった」「体力的にきつかった」等の意見がみられた。子ども理解に関することとしては、「子

どもは一人一人個性があることが分かった」「年齢による発達の違いがあること」といった発見が目立っている。保育者に関することは、「魅力的な先生がいて憧れた」というプラスの側面と、「先生同士のいざこざを見てしまってショックだった」といったマイナスの側面の両方の印象が記述にあらわれた。自分の行動についての記述は、子どもの前で絵本を読んだり手遊びをしたことなどがあげられている。

保育体験をしたことで幼児保育学科での勉強にプラスになっていることとして出てきた記述は、「子どもへの接し方や子どものことがわかる」(47件)、「手遊びや歌等を知っている」(14件)、「学ぶ意欲が高まった」(14件)、「授業の内容を保育体験の時のことをベースとして具体的に理解できる」(10件)、「保育園・幼稚園のことを知っている」(10件)、「進路決定に影響した」(5件)、「特に無い」(6件)、「子どもを好きになった」(4件)、「保育者になるための心構えができた」(3件)、「保育体験をした園で実習をさせて頂いた」(2件)である。子どもへの接し方や子どものことが分かるという回答は、特に最初の実習への抵抗感がなくなるという点からメリットとして挙げられたようである。また、短大での授業内容を保育体験をしたことで、実習前であっても、より具体的に理解できるという点は養成校入学前に保育体験をしたことによる大きなメリットといえよう。

逆に保育体験をしたことで幼児保育学科での勉強にマイナスになっていることとして挙げられた記述は、「特に無い」(55件)、「保育体験では保育が楽な仕事だと思ったが現実はそうではなかった」(19件)、「理想と現実との違いを知ってしまった」(4件)である。この設問に対しては回答率が低く、記述があったとしても「特にない」が圧倒的に多かった。しかしながら、養成校入学前の保育体験により保育職が楽だと考えていた学生が、養成校に入学後の勉強の大変さや保育者の職務の責任の重さを知り、楽しむことばかりであった保育体験をマイナスとして挙げていることも重要な視点であろう。

一方、本学入学以前に保育体験をしていない学生に対して、「保育体験をしたかったかどうか」を質問したところ、殆どの学生が「したかった」と回答している。保育体験は必要ないと考える学生は1名おり、どちらでも良いと答えた学生も1名であった。

保育体験をしていないことで幼児保育学科での勉強にプラスになっていることとして出てきた記述は「特に無い」「先入観がない状態で授業を受けられる」がほぼ同数であり、少数派ではあるが「全てが新鮮で学ぶことが楽しい」という回答がみられた。

保育体験をしていないことで幼児保育学科での勉強にマイナスになっていることとして挙げられた記述は、「特にない」が圧倒的に多く、「園や子どもに関する知識がないこと」「子どもとどう接してよいのか分からない」「どう動けばよいのか気付くのが人よりも遅くなる」といった回答も多くみられた。

おわりに

以上、本研究では短期大学入学以前の保育体験の有無が学生にどのような影響をあたえているのかを考察してきた。その結果をまとめると以下の3点が指摘できる。

- (1) 短期大学入学前に保育体験を有する学生は保育職への肯定感を強く有している
- (2) 短期大学入学前に保育体験を有する学生は保育の意義を強く感じている

(3) 短期大学入学前に保育体験を有する学生の方が保育者志向が強い

本学幼児保育学科への入学者のうち、7割近くが保育体験を有することを考えるならば、幼児保育学科への入学および、入学後の保育者への成長過程における学習の動機付けとして入学前の保育体験をより活かせる教育内容を提供することにより、学習意欲の向上と保育者志望の継続が可能になるのではなかろうか。

一方で、学生の自由記述にも見られたように、保育体験ではただ遊んで入ればよかった、楽しければよかったという体験があったからこそ、短期大学入学後の勉強の難しさや実習の厳しさとのギャップに大きな戸惑いを見せる学生も多い。

大半の学生は大学での学びや実習を積み重ねることで、保育者の職務を理解し、保育者として成長していくが、入学前に保育体験を有する学生が7割近くに上る現状を考えるならば、保育の場が単に子どもと楽しく遊んでいけばよい場でないということを、保育者志向を更に高められるような形として授業内容に意図的に組み込んでいく必要があろう。

知識と技術、体力と精神力が必要となる保育者になるためには、入学前の保育体験では学べない専門職としての厳しさ、難しさを養成教育の中で学ぶ必要がある。保育者の職務の厳しさ・難しさを保育者としての「やりがい」として感じる事が出来るように授業内容を工夫し提供することが入学前の保育体験を保育者としての成長のスタートラインとして活かす方策だと思われる。同時に保育体験を有する学生が多い中で、保育体験のない学生に対する配慮も養成教育の中で考えていく必要があろう。

注

- ¹ 『中学校学習指導要領』（平成10年12月14日告示）および『高等学校学習指導要領』（平成11年3月29日告示）では、それぞれ家庭科の保育領域として、乳幼児や小学校低学年児童等の交流の機会を持つように努めることが示されている。
- ² 保育体験に関する研究としては、伊藤葉子「中・高校生の保育体験学習の教育的効果」『乳幼児教育学研究』第13号、1-12頁、2004年、岡野雅子「中学生・高校生の保育体験学習に関する一考察-幼稚園・保育所側から見た課題-」『信州大学教育学部紀要』NO117、25-36頁、2006年、などがある。
- ³ 原孝成「保育体験と保育職への動機との関連-自主実習、日常的な保育経験、入学前の保育体験の検討-」『西南女学院大学紀要』第9巻、180-186頁、2005年。
- ⁴ 本論文では「保育者」と表現した場合、幼稚園教諭および保育士を指す。
- ⁵ 保育者に必要とされる技術については紙面の関係と養成校入学前の体験に基づく回答であることから、本来保育者に必要とされる細かな知識体系や技術に関するものを問うものではなく、事前の予備調査において学生が入学前に「保育者として必要な技術」として感じていた「音楽」「美術」「運動神経」という言葉を用いた。
- ⁶ 質問紙では「非常に強くそう思う」「強くそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「ほとんどそう思わない」「全然そう思わない」という7つの選択肢を用意したが、ここでは前3つを「思う」、後ろ3つを「思わない」とそれぞれまとめ、「どちらとも言えない」を加え分析をおこなった。
- ⁷ 前掲、伊藤（2004）の他、藤後悦子「高校の「保育」体験学習を通しての子どものイメージの変化」『家庭教育研究所紀要』23巻、108-118頁、2001年、室雅子「中学・高校での乳幼児の接触体験と保育教育の果たす役割」『家庭教育研究所紀要』21巻、75-85頁、1999年等があげられる。
- ⁸ 記述式の設問は質問紙に「宜しければ次の各項目についてあなたの意見をお聞かせください」という形で自由回答方式で設けたものである。